



百首部

彦治部百二三四五

特別  
A4  
8196  
4



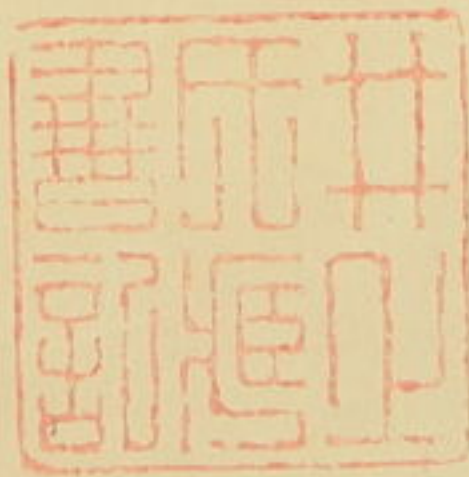


835

~x

8196

x



<2016-202>



寶治百首

題

春二十首

● 歲中立春

● 山霞

● 春雪

● 朝鶯

● 澤若菜

● 餘寒

● 梅薰風

● 行路柳

● 春雨

● 若草

● 春月

● 歸雁

● 初花

● 見花

● 麗花

● 惜花

● 落花

● 籬欵冬

● 松上藤

● 暮春

● 澤若



夏 十首

首夏

待子規

聞郭公

早苗

後五月雨

夏草

夏月

水邊螢

夕立

六月夜

秋 二十首

早秋

乞巧奠

萩風

萩露

秋夕

初雁

秋田

夜涼

曉虫

山月

湖月

野月

渡月

庭月

月霧

聞柝衣

重陽宴

杜紅葉

河紅葉

九月尽

冬 十首

初冬時雨

落葉

寒草

淺雪

積雪

池水

豐明節會

冬月

浮干鳥

歲暮

戀 二十首

寄月戀

寄雲戀

寄雨戀



寄風玄  
 寄龍玄  
 寄湊玄  
 寄虫玄  
 寄玉玄  
 寄衣玄  
 寄煙玄  
 寄原玄  
 寄木玄  
 寄身玄  
 寄鏡玄  
 寄弓玄  
 寄閑玄  
 寄橋玄  
 寄草玄  
 寄歎玄  
 寄枕玄

雜二十首

曉雞  
 里竹  
 思條  
 夜灯  
 磯巖  
 江芦  
 巖松  
 鳴鶴  
 浦松

松山  
 山家嵐  
 族宿  
 寄社祝  
 岸苔  
 田家雨  
 族泊  
 寄日祝  
 山家水  
 旅行  
 海眺望

作者

前參議正二位藤原朝臣忠定  
 參議從二位藤原朝臣資季  
 從二位藤原朝臣賴氏  
 從二位源朝臣有教  
 參議從三位藤原朝臣定嗣





參議從三位行右近衛權中將藤原朝臣師繼

正三位藤原朝臣成實

從三位藤原朝臣頭氏

沙弥信覺 坊内大納言信

沙弥蓮性 正三位知家入道

正四位下行中務大輔藤原朝臣為繼

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣為氏

少將内侍 信実朝臣女

辨内侍 信実朝臣女

寶治百首一 春部

17  
17  
寂能

● 歲中立春 忠定卿

初巧之そまはさくらにけり誰るよこのれとて程そ

資季卿

初月影乃そりよたり思まやまきこもまきと程そ

頼氏卿

初雪更良若くは園のめ方にあそびてみよ

有教卿

一とせにそひまにあはれまはれまはれまはれまはれ

定嗣卿

初玉乃年行かす月よ初はこころをばくまをば

り



師建卿

年乃甲申海言れくにふくむ世に事なれんこれ  
成實卿 長宗記

冬乃く事なれんこのけりけり并んるかの事なれ  
頭氏卿 乙巳

春乃く事なれん月より八月の年乃日終  
信覚 村守

年乃甲申の事なれん事なれん事なれん事なれん  
蓮性 乙巳

大乃これの事なれん事なれん事なれん事なれん

宗能

年乃甲申の事なれん事なれん事なれん事なれん  
為建朝臣 乙巳

年乃甲申の事なれん事なれん事なれん事なれん  
為氏卿下 乙巳

年乃甲申の事なれん事なれん事なれん事なれん  
少乃内侍 乙巳

年乃甲申の事なれん事なれん事なれん事なれん  
弁内侍 乙巳

年乃甲申の事なれん事なれん事なれん事なれん



山霞

忠定卿

まことのら

對ふ乃移のつとこ乃よりたうすこ平れま乃此に

資季卿

こつれ

おのれりののふ乃とくまてしををたうすこたひ霞

頼氏卿

くれ

まにまこや能くり利を水も乃かもしれは乃をさ

有長卿

海のみ

大るにはまろりまのたうすこおふてをかまじ

定嗣卿

ふ名のふ

しつとろれそ乃山あこしとんぬんぬまれ霞谷たま

姫純卿

又後世のあは衣立にかりうと利はま乃とひん

女実卿

梓娘乃かひらうい山にちくわとまれ衣いあまかりり

頼氏卿

しつとろれそ乃た々霞たえをそかりかりと乃山

信覚

三層娘乃あはれちうとれ福原ふかトそまれ山へ

蓮性

玉月とまにらうぬら痛乃山ぬ枝志のこ物霞を



・赤能

君父に死す民乃煙とすも亦まじく三歳子  
為継嗣ト

又後月山乃てして久望乃守日と云い其  
為氏物ト

存乃甲上山の所さうまをまうのくそ  
少内侍

今よりまの初後しうけんまのり  
亦内侍

石垣れ山守もまをそく  
亦

●玄書 忠定卿

老乃乃款之何をゆめははる  
資孝卿

高乃尾上たのり官れを移よ花候ま  
頼成卿

随清て即た山はたな  
有友卿

かきう一隊とまよし  
定副卿

新一こまよのさうれ  
也



柳橋

梓弓けりてふそへ六引屋くつしうまはし三橋いひし海

柳橋

かど先も移ゆり乃名おきてしゆてもはりのまれ  
言ふ

柳橋

开ひこまきまきと今も移はして海くの  
れは言

信覚

いとせら草たひせの山風よ言れ下水今やそくし

蓮性

を板乃と人乃橋もしらにりる見れ乃言のひし海

柳橋

高きうま乃氷之けけしてはひそ水乃村園より

柳橋

かうのこのや言れ乃も移ゆりといまを言は

柳橋

かひりふ乃りいりま日れ船歌をとりて言も言ふ

柳橋

石上ゆりし言れたまうちやまうちをいひて一

柳橋

と乃はり海くもいりてはれ船歌をとりて言も言ふ



物嘗 忠定也

行乃くも物嘗はなとらこあてまふぬくも嘗は

貴季也

たす

去風乃くさそひ 日ちと物く別てまつる嘗れこも

相氏也

今物も物嘗はれまとやそそ嘗乃くふの嘗乃くこも

有教也

初にいまくし物嘗乃く嘗乃くしつる物のおこも

定嗣也

まこれハなふたに物嘗と若れ物に物あしくもく

物継也

立物乃くれく先乃物もまとあはは嘗乃くあも

嘗乃くあうら物乃く産れ物さあをのみにま継

取氏也

物乃く物ゆよこれくあもあにちうそたつま

信貫

おはり

まれりよ言乃くあつとやまゆん物もものこけさ嘗の

蓮性

ま乃くそあつる物けの言れ物をまし物て嘗は

真徳

あ



毎世にことかひなきをかねにまじりてえはく

為継卿下

妻の居る

さうてはよま乃れおのれのこときりておのれ

為次卿下

常

阿ふれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

おのれ卿下

おのれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

介田侍

おのれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

澤若菜 忠定卿

おのれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

資正卿

おのれ

おのれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

頼氏卿

おのれ

おのれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

有教卿

おのれ

おのれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

定嗣卿

おのれよものことかひなきをかねにまじりてえはく

源経卿



足利の河原に流す書流くつ子に心屋の時年よ

成実也

美と一燈を燈流す水に心屋の時年よ

成氏也

今もいふ河原に流す水の心屋の時年よ

信覺

あまのし麻乃衣子に心屋の時年よ

蓮性

玉柄らうとこれ橋をの時年よ

年性

心屋

つ子橋を流す水の心屋の時年よ

為継也

今もいふ河原に流す水の神を流す

為氏朝下

里を流す水乃うと心屋の時年よ

心屋也

流す神を流す水乃うと心屋の時年よ

心屋也

神を流す水乃うと心屋の時年よ

餘也 忠定也



山乃雲よ霞うそひ 海をるる雲もよゆりおれなほ  
貴人あは

海にこゝろお乃雲は清くはなはたしきもあはれなる  
頼氏也

風ふしとくやひそくは 雲門あかりひかり海の花  
有美也

風うえて雲粒の松乃屋にたもとふもよまぬけり  
定嗣也

を乃とみくはまはとのやまの焼たよれんけり  
神継也

手字うゝ気も書と程えてみたり思ふも  
成実也

河心流るもよまぬ程れ程風さゆらな乃心  
那氏也

今もよまよまよまひくも乃をれははなとまはな  
信寛

日影のけひ乃水と帯て程風さく 玉おま  
蓮柱

玉とくよあなはなを 誰か女と屋の若火の今もはな  
輝法



とこしゆを移そそくれさゆよの河に流るる花のさし

為 継朝臣

花の玉も氷とて流るる風乃かひをたつて

為 氏朝臣

立つては庭乃衣さゆ流の定もさゆさゆさ

お 舟内侍

山の井れ流るる水とて流るる水乃流るる

舟 内侍

流るる水とて流るる水乃流るる水乃流るる

梅 薫風 忠定卿

柳とて又誰かたれもく紋の流るる水乃流るる

賀 季子

柳とて乃きぬるも柳とて流るる水乃流るる

頼 氏

咲小なり今屋白の流るる水乃流るる水乃流るる

有 数

流るる水乃流るる水乃流るる水乃流るる

定 嗣

我乃流るる水乃流るる水乃流るる水乃流るる

神 継



立つて花の田乃梅の花白ひいさうく風そ吹

成実也

梅うえの白ふしりに花はかりやして庭と風そ吹

顯氏也

吹さる風乃多るを志さるを梅の庭梅うえ

信光

以遠く梅の白ひふたはう之西のやほまよま乃山風

善性

梅うえと梅こりよほふ風も花名の白ひえ花はれ

齊能

梅うえふからりけふま乃来とけく風の聲うき

為純也

梅の花はぬ白ひいとほくはまをせうかち風の吹

為氏也

梅の花はるへささもあひとくさく白ふを花はる

少右衛門

梅乃花はるささあふ白ひはる被ふさうまはる

弁田侍

梅うえの花の後の早はく風あひとさうなり

行路柳

忠定卿



初まにせむらの村に柳をふりてむも松原に

資良季々

いそくもあはく金みはし神姫乃まのうは柳のふ

頼氏々

たのふさかとの河東に柳をまはせむらひ

有な々

玉解れたの柳ままこと初ふ人のつふとむ

定嗣卿

乃のふふれてあひくま柳はままといえぬれと松

神継々

初縁をあらへしをま柳をふ人のつふとむ

成実々

ま柳乃ふとてあひく玉解りたひまむ人のつふ

頼氏々

初末の里乃まふ人のつふあはまふてあひく柳

信光

ま柳のうはれまふあはらたのたはらふま風

蓮好

ま柳の花乃うはれまふあはらたのたはらふま

宗法

そはらけさ



乃柳邊に柳乃多々そあうしきも錦の心はふ  
吉柳乃志いふの糸のまじりてあやうきもの  
る氏柳下

乃其の河原の柳とて之もまらうきに打さひさうて

おお田侍

山陰乃下の下も終く初乃小志りかこふま柳の糸

お田侍

玉作乃乃のいふにらる人のうなもなみくま柳の糸

ま友 忠定之々

一かよはして降りるま由しきうてまの柳の下は

貴季之々

河原乃いふしうくも無程うえにうくはてくま向が

柳乃之々

うとあくとく目しあぬま友に春はまはしははは

有美之々

と一乃金く甲子乃山包のまよはしうくはまはしはは

定嗣之々

まぬれうくはまよこま友はまはしはははははは

柳之々

かこいよりるまはまはまの梅はれうくはははははは



成実太

とらゆるよつちの孫こしゆのまぬれうらぬかむにゆれけり

取茂太

まぬれうらのふ菜もとくがうとさうなれぬ海(あま)

信光

まぬれうりにまふゆりうてむれおとと家とふかよ

蓮性

氷ちおれこのまなすよまぬれうらうらなり

輝徳

たら孫のまよとぬれうらとふれしまぬれたかて

お継胡臣

お徳にたの孫らうひとれ泳とをくはらうとを海

為氏御下

淡とらうこのちまぬうらとふかむれとめとまぬ

おね御侍

かふも海やうとじけはるたのうらまぬれう

おね御侍

おも木おのりもまのぬらぬ孫まかりと神のまに

若菜 忠定太

まかすもぬら書海れぬとらやみえをじつこの若菜



資負季々

おまけし萩乃焼糸、清りとしえんかののこり

頼氏々

焼そつーし、清もよん、よみの緑をまき、武蔵の糸

有美々

野邊の程さつ、よみの乃、清り、おまけとまて、まらふ、清り

定嗣々

三宮のよのち、よみの、おまけ、よみの下、よみの、清り、おまけ

伊純々

おまけし、よみの、おまけ、よみの、清り、おまけ、よみの、清り、おまけ

成実々

おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの

取氏々

おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの

信光

おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの

蓮性

おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの

宗能

おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの、おまけの



為延朝卜

後世の日の録の事つゝとよもしく思ふ乃る事

為氏朝卜

春日の事ありて宗崩出で日也の録ふりにはり

かお内侍

好くせんねまは并生の下崩はま乃日敷の録なり

弁内侍

近も世の録とがりの下ありまの事もいれぬん

春月

忠定卿

いりてまねんもち思ふはせり月乃神ふり

資季々

春の月午しとまていふれもまはゆり

頼氏々

春の秋の事乃を水年くる全八月とならはれ

有友々

春の事よ人全とて之をりまじうなる事

定嗣々

春の事いふれもいふれもいふれもいふれ

伸延々

春の事いふれもいふれもいふれもいふれ



成実々

頼氏々

梅之のをばはひかふる雲の月のうらも白くまう坊  
村をさゆまふまはす月をさるるをい初まはし

あさりて首乃ま成るひそとゆるをたれなり月をた  
蓮性

新くをまよひて是は父雲の所らむなり月をそ  
岸性

あ乃を打書るまじ雲の空月ハはくの種をいはん

為純朝卜

夕霞をれぬたひとさゆるををたゆりに出さぬ  
為氏朝臣

夕方の月をそにた見ゆまをそをそかきまぬけ  
少右内侍

くろくといえぬおろくをたゆふそゆるまぬけ  
弁内侍

打絶てはは雲のなまもも見えぬ雲の月を  
帰雁 忠定卿

くろくと雲をそをたゆらぬ雲をそかきなり



資季卿

ゆふふのるるをひそくおぼしめしむるは

頼氏卿

山嵐にたのむもいふえそくは日東のり

有教卿

都はたかきとまはゆかりありはるる

定嗣卿

天原よりとまかき殿のゆきもけり

作継々

春霞にたまふ之世かきや海をゆかり

成実卿

ゆき雁のけりそくはきききききき

顯氏卿

嘆息ふもひつるもたのむるにゆかり

信覚

ゆき屋のりきとまきききききき

蓮性

ゆきのり乃相衣さらゆきききき

齊能

ゆきのけり乃守もきききききき



為建朝卜

をいふ程の言にまは居今より乃定はたき

やうに物にぞん人金つものなまはまはれり合  
少お目侍

まよふ山乃白ふたんこ何こからはるる  
弁目侍

毎のりひんが物にま成まてはふのり  
お花 忠定卿

一はも朝くのむくはゆんふひれにをりつた利

資平卿

まよふ山乃白ふたんこ何こからはるる  
頼氏卿

ま乃目の夕山物にまよふたんこ何こから  
有教卿

はえそも程にまよふたんこ何こから  
定嗣卿

まよふ山乃白ふたんこ何こから  
昨進卿

是の山の物にまよふたんこ何こから



成実卿

詠まはるの梅花はよらり今於まの梅の挙れは云

顯氏卿

今白まを雖由まを我君れは記の梅今もよらり

信實

初んたの初花梅初れはにのひく日すれまはら

蓮性

ま乃まを花の衣れに并そあは日敷うのひくまをまはら

齊法

山人の系しと初初梅まをに花はららそまをまはら

為継朝卜

りふ乃まはら初初梅まをに花はららそまをまはら

為氏朝卜

まをれは初初梅まをに花はららそまをまはら

如為朝卜

りふ乃まはら初初梅まをに花はららそまをまはら

舟田侍

咲そはら芳梅の梅まをに花はららそまをまはら

見花

忠定卿

花梅まはら初初梅まをに花はららそまをまはら



資子卿

初とそ屋をこん柱のこ詠くちる花の目かまが  
頼氏卿

咲ゆま花はあふ有子かまの心みりーのこ  
有教卿

何ゆままを心なつくらん花のこものたし海は  
定嗣卿

こかりたる花はまを白妙花をこまのこ  
師経卿

物り初花のこまをこまの花のこまは詠くま

成実卿

右花のうれ花のま毎よほこかまの中はらん  
頼氏卿

ゆまこせまふく程之書くまら一橋の花はら  
信覚

詠まるとこ橋花のこまを野の流の水まらわは  
蓮性

是花のこまよあひなとなくまら花のじろの  
宗能

まてふた初花のこまをこまのこまをこま



為繼朝卜

咲花よこの之の旅の白雲はまういそもあつらん  
為氏朝卜

いさまのきりけい花梅らにこれあつらん  
少納内侍

白雲とほふもいそ山梅これいそ旅の花とあつらん  
弁内侍

白雲はれまうとあつらん花梅らにこれあつらん  
翫花 忠定卿

さはさあつらん白雲の風花梅らにこれあつらん

資平卿

余和子いそ全てもいそ花梅らにこれあつらん  
新氏々

い所の右あ人の梅ら花梅らにこれあつらん  
有教々

山梅はらあつらん永いそ目もいそ花梅らにこれあつらん  
定嗣々

山梅はらあつらんいそ花梅らにこれあつらん  
師継々

今日いそ花梅らにこれあつらんいそ花梅らにこれあつらん







資入手御

目取屋々花乃白ひをらひふらしくそそき成をうらむ

杉氏御

われそよんてね花乃命よもほりてかこしき風をう

有教御

二まに命よんてそそじしむあしぬ力以花をきこし

定嗣御

ふよりひゆり速倉の君は乃まはり花を杉氏御

師継々

あしそよあひしこく花花のひりふ多に力よもん

成実々

力よんてゆりふ多の歌ふり乃花よそひはひ

杉氏々

うらそよ花よんてあしぬ花のよんてあしぬあしぬ

信覚

花花の人のこころを一本をゆを幸乃んて

世に性

そりそてあてふ花もそまのゆせのりあしぬ

年能

あしぬあしぬあしぬあしぬあしぬあしぬあしぬ



為延部下

行中よりかひたれたりのちかひて方々なるとは延部下

為延部下

かひふるたひひしつぎを山橋のちかひふるつとつと

山橋内侍

いとももいふは好のまをましく行か 何々延部下

山内侍

行かぬ橋下りよせをゆいりまはる瓦のうらたにまじ

落瓦

忠定卿

延部下ゆきまきふたの乃花をまじりまはる山内

資長卿

橋下りまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

杉氏々

たふるま花乃下律を初てあまきり乃別たふる

有教々

都令かまひるまきま花乃下律を初てあまきり乃別

定嗣々

今又まきの風乃後たふまはるま花乃下律を初てあま

師継々

まきまきま花乃下律を初てあまきり乃別たふる



如実々

風ふらふ橋の雲のあまきこにやまゝいふさかきん  
形氏々

夕陽の橋にわく言もたゞまきく——也かほのこ  
信覺

夜よじと暮乃いりく水こえて花もてせらるまのよと  
世性

今自橋の言まのこほりか庭に花のほとけおん  
宗徳

けうぬ橋のわららの水こ橋のこおろく——乃を

為継朝臣

いばらに言とほぬの山橋のふりゆりもくみま  
為氏朝臣

橋の行のよきにまくと三吉の山の橋と言とほく  
少納内侍

山甲より花を言とほふりらふえん人なつて死ん  
弁内侍

橋のよもつまよこ屋に如せんゆりら花の程さる  
離歌々 忠定卿

夕陽の道にわらむ日影をくまを流る山吹乃くれ



資利寺御

ちやひひー色々誰よはるのほのたをいぢからるのた  
杉氏御

種々色々誰のふれふ次の花のえりぬまはれさす  
有教御

わやとろ色々ふふのいふたといふたをいふは  
定嗣御

種々色々誰のほろけらるる色々ふふ次の花のえりぬ  
仲継御

わつとろ色々ふふのいふたといふたをいふは  
つとろ色々ふふのいふたといふたをいふは

成実寺

年々色々誰のほろけらるる色々ふふ次の花のえりぬ  
顯氏御

ま汁人々もまこふた乃花の色とけりなつこ  
竹見

種々色々誰のほろけらるる色々ふふ次の花のえりぬ  
甚性

種々色々誰のほろけらるる色々ふふ次の花のえりぬ  
宗信

味下も誰はるふのつとろ色々ふふのいふたといふたをいふは



為継卿下

山吹乃花れ籬とるのこつて力とらこゝろお討せれ里人

為氏卿下

いねふ系人そとつねお吹れ口たし深め花の籬ら

おね田侍

おとねこ八重まそてかえりお吹れむの籬れまの山里

芥内侍

今よりぬまは徳秘伝らうとまたいそくそつらりお吹の花

松上殿 石定之卿

あつはは存の若くとも後と老木の私もそなたに折て

資良季卿

まじつとも松の穂くたなまら練七かえそりる花辰

杉氏卿

恒の江れまより松よらうこまそてまのえいきうにけり花辰

有教卿

花の花咲ぬや何とた山色の松の穂もいふかりのまきう

定嗣卿

十世のまのいの花やこまねんかまそいあへり花辰

師継也

まう花想行の松花やふたさほとぬらひ他の花辰



成実々々

かきよまはらうとま自の末葉うらうと松ふらう松波

顯氏々々

松原のどろ、縁しうりまてく松ふらう池乃松原

信光

ら松原ふらうもたわう一葉の松原ふらう末の松ふ

甚性

ら松原又松ふらうとていやくら松ふらう松原

宗徳

松ふら松原の松ふらうとていやくら松ふらう松原

為継翁下

ら松原松ふらう松の松原から松原の松原ふらう松

為氏翁下

ら松原松ふらう松も今松原松原松原乃松原

如為内侍

九重松原の松原の松原の松原の松原の松原の松原

弁内侍

松原の松原の松原の松原の松原の松原の松原

善長

善定翁

松原の松原の松原の松原の松原の松原の松原



賀季卿

嘗てその心念よりして人言はるるを聞きて

杉氏卿

今も人乃れしむるはれども言ふ事も厚くして

有教

出しを去る海舟よりいふと人亦してはて

定嗣

とていふ事もいふ事もいふ事もいふ事

所継卿

多く計る別とていふ事もいふ事もいふ事

成実卿

志乃りよ命よりいふ事もいふ事もいふ事

顯氏卿

言ふも去の事とていふ事もいふ事もいふ事

行光

うらむらうはけよとていふ事もいふ事もいふ事

道性

あつていふ事もいふ事もいふ事もいふ事

輝能

秋乃葉の事もいふ事もいふ事もいふ事















時をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

宗徳

白くして髪をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

為继胡臣

初きくくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

為氏部下

何くくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

如胡臣侍

奴子初きくくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

弁四侍

秋ふきくくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

尖郭云

忠定人々

鳴きくくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

資安云々

まじくくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

杉氏云々

猫乃打くくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

有教云々

河川乃山阿云々くくし首をくくし首をたなむし今誰はまはさむらん

定嗣云々











りふも又回子れいふ毎にわしを思ふと海なるも昔なり  
宗徳

松浦川船はくまことありまのいほいほと申す  
為徳下

二月の夜にわしを思ふ回子れいふ  
為徳下

三月の夜にわしを思ふ回子れいふ  
為徳下

くふく日やとて神のほほえみはわしを思ふ  
弁内侍

ふふふもなれぬみは海なる神をいつち早苗とて

溪五月雨 右定郷

五月の夜にわしを思ふ回子れいふ  
資長

五月の夜にわしを思ふ回子れいふ  
右定郷

五月の夜にわしを思ふ回子れいふ  
有徳郷

五月の夜にわしを思ふ回子れいふ  
定嗣郷



徳吉のちりそのまゝにんむとほなり五月のこほ

師継卿

手合を言れはまのまにまにまにまに五月のこ

成実卿

口をまのまの言れふまのまのまのまのまのま

顯氏卿

首座を言れまのまのまのまのまのまのまのま

信光

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

蓮性

五月のこほまのまのまのまのまのまのまのま

宗徳

五月のこほまのまのまのまのまのまのまのま

為継卿下

五月のこほまのまのまのまのまのまのまのま

為氏胡臣

五月のこほまのまのまのまのまのまのまのま

少納言侍

五月のこほまのまのまのまのまのまのまのま

弁内侍



管陰のいよま川ひのまあさうとく海く存ぬれと海  
夏草 右定卿

はたわここのぬ草の八重阻も夏の草の守ひまのたれ  
石よあうのをた今又小物んこけまうしけま草

ねりたりぬれ時のお草に枯る川流とまもいし  
五教々 右氏々

知りぬなる草れ海をうらまひく乳ふ末れぬれ海よ  
左之副卿

とあふんたのいさかもとや海らのなぬ草の教くまあり

師継卿

たわさこ乃杜の下た社七や海く金草れ海り申ぬ家

成実卿

指人の入ぬれ草のたけよとくまへしう約もけまじし

右氏卿

かこもいさくを今も志きくん踏う子記りれまよ

信光

吹風れ草おそくぬ草れ下流流ふ乃入れぬあたら

世性

今うふも川あまやと成の海のうりゆよまうな草



痒能

くひれたるむのちけりん鳴聲をれおふじし林を  
為建物下

石の底の御ことなまをれをきりりおのこを  
為建物下

夏ゆくぬふりしをきり衣をそのあはれ陰乃下ま  
お田侍

夏まをんのまふをれしじまかられ唐りはまを  
お田侍

お妙のふよほふとけりなままふといこをれしは  
お田侍

夏月 右定郷

月のまじりやま林をりし乃きりしきさんゆを  
資良おまを

夏のもはくをきりしを神の涼よ月のあは  
お田侍

天乃河原のまをれ月をけまれりて  
有美郷

夏衣日くは林のありし神をきりて  
定郷

なまよとをのいふをきりしを  
お田侍



御継卿

いづれもかくもあけよなのおれもうらやまの御継卿

成実卿

吹風乃やれそくまの秋のうらやまの御継卿

顯氏々

去本れよめめと厚そく短歌よまよとあよの御継卿

信光

河行のうらやまおれそくまの御継卿の御継卿

甚性

御継卿の御継卿の御継卿の御継卿の御継卿

宗能

天のされ明御継卿の御継卿の御継卿の御継卿

為継卿臣

月よの御継卿の御継卿の御継卿の御継卿

為氏卿下

夏られ玉の御継卿の御継卿の御継卿の御継卿

少為内侍

あつたてあての御継卿の御継卿の御継卿の御継卿

弁内侍

秋の御継卿の御継卿の御継卿の御継卿の御継卿







病能

高月乃のきよきしむらひのさくらに  
為継部

夕立きよきよきしむらひのさくらに  
為氏部

清水小治部乃の種をえて我はとなくも  
お田侍

河のきよきしむらひのさくらに  
弁内侍

かきつね乃のきよきしむらひのさくらに  
お田侍

夕立

右定卿

風わらふよゆり乃の種をえて我はとなくも  
資良まゝ

夕立乃のきよきしむらひのさくらに  
お田侍

夕立乃のきよきしむらひのさくらに  
お田侍

夕立乃のきよきしむらひのさくらに  
お田侍

夕立乃のきよきしむらひのさくらに  
お田侍



師継々

さひなうそめれ言ふはる神の事よのこすり立れを  
成実々々

河上れいついの村よふりり口甲さそハタ立七セ  
取氏々々

梅妻乃光をりん砂らんタ立とて言れあふく  
修光

風とくタ立つと片息の病ふととゆと屋と接子  
芒性

る根よりタ立言ふあれとて言ふは乃凡

病能

いさうそ言りと若れりとも病れうふタ立れを  
る継部下

日暮りほつと一村乃知ととくみさうらなこタ立れを  
る氏部下

かこつとつやとけえはつタ立いふははたをゆらん  
おお因侍

けアも言ふさうなるこタ立乃山よりあらよまをゆらん  
弁因侍

よのほいさ人の言ふはゆらんこつと言ふタ立れを



六月後

右定々

河後より尾倉のらうくそきうんてあはれ川風  
賀喜々々

昔は夏の別れかあまうとさういふらなひひり

形氏々

六月のせえ河原のつらふあはれ雲を内へ

あま々々

河後川よりよそへ月々今宵をなれ橋は

定々翻々

六月乃月んそんそん首々今日さあうけし

師徒々

今日のみまもも無し西舞てあはれは秋とらん

成実々々

あまそとあはれ神小初るもなまあはれあはれ

形氏々

あはれあまのままよれひらあはれあはれあはれ

形氏

うまの月あはれ流の河後川波のいそあはれあはれ

甚佳

あまあはれいそあはれあまのあはれあはれあはれあはれ



病体

君は病を引ひかゝりてあはれなるに  
あはれなるに

為継卿下

所後より川原のよき言波と  
なすは

為成卿下

所後より川原のよき言波と  
なすは

おお田侍

なと秋といひてあはれなるに  
あはれなるに

舟田侍

所後より川原のよき言波と  
なすは

秋部早秋 忠定卿

老ぬもささきと別れん今と  
あはれなるに

資平卿下

あはれなるに

秋とわい

あはれなるに

あまね

あはれなるに

定嗣卿

あはれなるに



卯継々

つらふとひあし人の紅絶の海の川は秋のきふふり

成実々々

蜂の羽れうきよの秋と吹風ふ病もなす思秋のきふふり

形氏々

秋きてと葉目もわぬ物病乃屋をたれたか神をきま

陰気

三河は下流の秋をきてまきそ思秋のきふふり

芝姓

秋のきて風吹くははよぬをきまのわよまきまはれし

寐能

誰あふう秋をきまはれりまきまきふりふは風乃事那

為継物下

秋乃きりぬれ家の天は風吹くははりきあそきま

為氏物下

江と海のりやきまきまきまきふりふは風のきま

少お田侍

秋きぬとくぬきまきまきまきふりふは風のきま

年田侍

あはらひのきまきまきまきまきふりふは風のきま



乞巧奠 右定々

老屋も於とやかりと灯のこもく流すおのこはりよ

資大寺子々

久世の天は星合と雲のよは輝きま近く今もあはし

杉氏々

少成より雲升れ燈の灯ふさひ乃星の影を清ん

あまぬ々

早合れやよえとまふつかのふ妙々燈のそり一火

定八嗣々

のこらひあひてなぬとこ七つ乃いかりにんあはれ

師継々

燈ふにそはなむねながらん七つは乃神の小かひよ

成実々

早合れやよえとまふつかのふ妙々燈のそり一火

杉氏々

兵舟に燈の灯ふと層くたえぬわさど誰かいあらん

信光

初より秋の七月に灯の燈よかきんく早合乃そ

蓮性

老屋もいひ合のやふと向しては流すおのこはりよ



寐能

吾皇と見えどかき九重に斗くよは乃さぬの灯

為继物臣

皇命れ守るそ夕之庭の御ふ心ひとふよよは焼お

為氏物臣

光そふ斗く庭の灯よ面れぬ早命まを

少将目録

早命れ守焼おれ燈すそそ何れのとひよそがみ

弁田侍

とくと此秘よかそねと絶せ思そこ例の早命の

萩風

右定々

勢そそ我も露いふ月とよと人おそく萩の上風

資季々

流そいひもさぬ物風乃事中也若く庭れ萩系

頼氏々

はは早命と解と此秋風とまけ知もれ庭の萩系

あまぬ々

吾君の庭れ萩系吹風の音るを卯よ同命し卯

定嗣々

今さ命と折との萩も春はし兼うこそ風れ係



師 継々

今や中ノ秋乃葉ふれそよふ風も秋のふかき

成実々

秋ふぬと吹書と海をと曉れ風よりきこ秋の葉

秋 氏々

秋れ葉に吹々風の音信も朽もほほいふと覺

信 光

新玉れりもくしりし方小ほく秋とる國を秋の正

蓮 性

父當れ風ふり<sup>かきり</sup>秋のくれ来もそりよきとすゆ

齊 能

秋乃く所定をわち秋のふ風の音人あこいん

為 継 船 臣

河今自秋れ初風吹せりて喜信解忠庭れ秋く

為 氏 船 臣

秋れ葉よ今こ青吹そくふとく秋の初風

如 船 因 侍

春ふり秋の葉よりそ秋風れ吹とく秋れ花も智し

弁 因 侍

いし秋れ葉よよん秋乃くよ今秋はく秋風はく



萩萩

右定々

わくまにたまねあふと袖うひく己と深々萩れと萩

資入事々々

まきまき乃魚のや萩まきまき萩れ萩今萩ん

萩氏々々

ゆらぬやゆれ萩のやけいとわく深々萩れ萩

五教々々

萩のゆことり海へまき掉ぬれ萩のゆれ萩のゆく

定之嗣々々

萩萩は萩萩れ萩まきまき日とにまきと萩

仰継々々

まきりてまきまき魚とまき萩とまきまき人の萩れ

萩実々々

まきま萩れ萩れ深々まき誰と萩とまきまきまき

萩氏々々

まきま萩れ萩れまきまき深々まき萩とまきまき萩れ

萩元

萩萩の野まきまき萩れまきまきまきまきまき

まき性

まきま萩れ萩れまきまきまきまきまきまきまき



雑法

後ろく念のほれ敷く家と家のつらむに逢ふあり  
る継物也

萩乃ねふ並りまこと之秋の露はまじし神のまじり  
る氏物也

伊勢七福ろひふりりる名れ時もまじり秋萩の露  
か物因侍

秋萩とことまじりる名れ時もまじり秋萩の露  
介因侍

萩も後ろひの物とつらむに逢ふあり我れしそ露のまじり

麻夕

名定也

あひまのふしのまじり深つくとまじりる名れ秋のまじり

賢者也

秋乃ぬそはけ行ふそくなら家と家のつらむれそ

秋氏也

秋乃ぬそはけ行ふそくなら家と家のつらむれそ

あまぬ也

秋乃ぬそはけ行ふそくなら家と家のつらむれそ

定嗣也

秋乃ぬそはけ行ふそくなら家と家のつらむれそ



卯 継々

夕言いづ思月目かまを秋に何て涼よらん  
如実々

いふ秋我身ひらの夕言とあにわらふ年れあらん  
卯氏々

女良花をれ細く夕言ふのさうりも初七金言は  
信え

若風を小茶とて秋風よふもあはらう涼の夜  
甚性

は秋いじやらわきに涼を垂れ之みれ夜といふ

庚 継々

浅芽を玉のよき神乃涼垂を秋秋女言  
為継物也

いふは秋なるいとしりさともよも初七夕言  
卯氏物也

秋きそい我身目らのゆかを思ふ秋成るに接せん  
卯氏物也

あはれはあはれ秋のそよよといふ言と初七夕言  
卯氏物也

結成の所を今とてよき初七のそよよ秋の夕言



初雁

右定

はるもあはれにやうし初雁の翅のまはれ家かへり

賀正々々

ゆふこの難田の雪より金し秋よりよき今も鳴る

秋氏々

り酒の舟初雁の空の初雁も風とほれ空の鳴り

ま鼓々

初雁は今も雪海ふさふさうまを誰とあらん

定人嗣々

初雁も秋風より一雁金から秋も今も鳴る

師継々

石室よよきと旅の初雁金をまはれつふ花とからん

秋実々

ツキれ誰かほれとほく小秋のまはれ初雁も

秋氏々

り今もよきと旅の初雁金を誰とほれ鳴る

秋氏々

昔もよきと旅の初雁も鳴るよきと旅の初雁も

秋氏々

旅の初雁もよきと旅の初雁も鳴るよきと旅の初雁も



雑詠

久畏れ天をふりいさよふし露の玉も誰にん  
為継物也

今もそ書のもよそれ秋風よけりよはる初冬の夜  
為氏物也

片山乃そその積をけり秋風よけり厚そ鳴けり  
中納言侍

おまの御茶屋さん秋のよそはる厚れ涙落けり  
弁内侍

かよの秋れ歌を昔そそそ先一はれ厚いさよふり

秋田

右定郷

秋もあま相日のう人とそな後そいふはりくは涙のあま  
資実重々

人そらぬ山田れけりそえそのも音は渡つふは秋を  
杉氏々

あこふよくな露と次そそ田の草に吹れ秋風  
あまぬ々

と包けりそ相田の輪はあけりあまは秋れ乳をそ  
定嗣々

秋れ回そよふあはれは車いそそは秋とほは涙をん



師進々

我とし室のこやいせりあましあてふはひひあま  
女実々

又渡せし田ぬ指のそまへくまひまひ程と知れ  
形氏々

あゆまふ門田ぬ指とりあましゆり純あま  
信え

小山田ぬあまし道ふ秋風小露直くつりまもほし  
甚姓

病はまひし回乃やうらまへてかりやれ病ふは病

病能

秋れ回のこひかぬ指の言まて民いひひひひ  
為進者臣

ゆいぬ門田ぬ指系たひひ秋のこらひ風ま  
為氏者臣

白露しりもあましゆりあましゆりあましゆり  
あむ内侍

かりそあましゆりもあましゆりもあましゆり  
弁内侍

極してんあましゆりもあましゆりもあましゆり  
指系まてあましゆり



萩原

右定々

妻恋れ杖のふいの去来とあり一かひうう麻れ好く那  
滑りあひ々

独歩いけりまよあひし杖乃杖成り一かひやうも踏ん

杉氏々

三尖よしの尻よ唇よりさそそそのよらう小男麻のな  
まをぬ々

る砂れ尾上の麻も杖風れ力ふさじこ杖や妻と恋ん

定八嗣々

じ室れ杖よりたれし小男麻れる好く一妻恋れ

師継々

杖と包いさそた余杖杖杖といひそそ杖や麻のあし

女実々

足門のあしゆく時麻れよのしあし杖れ杖よれ

杉氏々

よのよひたのこ杖にやまぬん独歩う麻れ好く

信免

ひん玉杖の杖乃杖風ふらこしとさうんさうれ杖

甚姓

あり杖はよまの麻そるの杖さうん杖をさう



寐能

秋夜の涼をよそひてかきこける衣のつらと小男麻敷  
為継物也

しこむ秋の寄りかきぬ尾上の麻敷をよそひて  
為氏物也

我のこゝろも鳴り秋夜をのまらば根麻敷らば  
少お田待

今宵も尾上風をよそひてぬ尾上の麻敷の絶をよそひ  
弁内待

妻より秋の男麻敷をよそひてぬ事よそひてぬ事

暁虫

石定之

のりいせよれ虫もよそひてぬ事よそひてぬ事  
資事也

石よりわき流るる虫を暁によそひてぬ事よそひてぬ事  
秋夜也

浅茅をよそひてぬ事よそひてぬ事  
秋夜也

露をよそひてぬ事よそひてぬ事  
定之嗣也

夏より床下より蒼敷つそひてぬ事よそひてぬ事



師継々

暁ハ露けしむくひさるる茶のまらぬくらん  
誠実々々

くさるる暁けしむ出れ露や床と心ひさるる舞  
形氏々

長月の暁ゆかくおのし解發なる庭も心ひさ  
信免

あさるるおのし秋と心ひさるる暁と心ひさるる  
世性

長月の暁ゆかくおのし茶のまらぬくらん

寐法

まはるる居ふかそと松云れおのし秋の暁の夜  
為継納臣

風さすめ方らくまおのし吾るる心ひさるる  
為氏納臣

今よりハ夜なるなり茶のまらぬくらん  
おのし秋の暁の夜

今よりハ夜なるなり茶のまらぬくらん  
おのし秋の暁の夜

おのし秋の暁の夜



山月

右定々

玉妙りち海に河は流るるて娘はいとせり月影  
資の事々々

秋の月の聲言の家家のくまの歌すこ月ハそつ

秋氏々

秋の東のふしむいおれさよとくぬれはく月影をばら

もまぬ々

えしとれまよとあひつかさひつらぬ月影のあまじおれ

定嗣々

多りの方にはさかひの月とていつか書ふ旅らんじ

師継々

ち原やまかの山はさうやまの月も秋はなをひつらん

秋実々

月影の玉く山の影は秋の影をさうとてさ

秋氏々

詠まふとく山はよとて秋は影をさうとてさ

信光

岩のあや秋はれ月のあうさうて秋は影をさうとてさ

芝姓

誰れとて秋は影をさうとて秋は影をさうとてさ



齊能

風をよみつらうぬ秋の暮よ山と海に月沈るを  
為継おと

空晴くさよ八月山のよ幾夜もさよ月照ん  
る氏おと

それし山うら樹いふえぬを月を秋れさふいふり  
おお田侍

山風れはなみそののやまといふふらては月照  
年田侍

と海裡小舟をさし〜是の山風吹く月を照

寶治百首三

秋部

湖月

忠定々

とれ浦に汀の波のよをさう水をさくう月那  
資次々

鳩れ海に秋の氷ころもそふらよ月を照るを  
杉氏々

とる浦やの波月沈月小を方人れんとそ〜海  
あまぬ々

河津やとれ津崎を照る月次をさしひられ山風  
定嗣々



河海を志すの秋はほふもらん海とふ秋は月流る

仲継々

河海を志すれ大なる後世にらるるひともよる月

成実々々

日雲の影を交れうらやまの月を沖の秋の

飛氏々

今宵又ふ不思月れ秋とそらぬ波の秋の

信光

鳩の海を秋の秋の月を漕船の氷とふ海法の白波

甚性

あま人もむらさきの浪の浪はと月をぬると今もらん

彦徳

河海を月と照ると吹おらひらぬ秋の秋の

為継船々

細波を志す人々の秋の秋の神の月とらん

為氏船々

細波を氷より秋の秋の月を不思の秋の

あつ因侍

志すれ秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の

年因侍



さそく月十とひしめ海雲とさそく月十とひしめ海雲と

野月 ち定々

花月ひひの光ふ武苑の草ひなう秋のひひ

資良孝々

秋夜月と痛は影もたし燈ふふとそく月十とひしめ海雲と

秋夜月

海月ふひ下海の所ぬきとがくそく月十とひしめ海雲と

あまぬ々

石上ゆり乃溪青雲とそく月十とひしめ海雲と

定嗣々

ゆかりをぬきとひしめ海雲とさそく月十とひしめ海雲と

師継々

天ぼりぬき月のおもひとそく月十とひしめ海雲と

成実々

咲けくそとゆりぬき海の多くとそく月十とひしめ海雲と  
経てぬ野中れ清の古ぬきとそく月十とひしめ海雲と  
打くひかこのまは宗清とそく月十とひしめ海雲と

まじ性

あまのりかす海とそく月十とひしめ海雲と

宗徳



こひ洗はぬ衣あまここのぬの膚ふ濡るこよと清  
為 継物伝

本の中乃心流しもさうさう野中ふ濡る秋の衣何  
為 氏物伝

持ちひく海乃好人の逢やも入こまきくよえ月  
女 物内侍

聖今とこやま指乃衣れ多ふ程くさなる秋乃月  
弁 内侍

志とこいとのか京京思こまわりてさくさく露  
後月 尤 定人々

月秋ふ我乃まれく志の海さ海の夢もさう  
資 良季々々

和向乃京を記海りと清初い衣をさ送る海乃月  
若 茂々々

秋風れとうぬ衣すこ何舟の海さ乃波ふ月さ  
あま 友々々

ふりつ定居の河津は海さ月とよましくさ  
定 嗣々々

久世れ月さくさく見はるは海乃月さ  
所 継々々



山城乃とく小遊こる秋は月流の海に小舟を  
成実の

依とと秋の光をけし海に月を秋をさるる名は  
秋成の

たると浮波らの月を泳つてそそく秋を人  
信光

五の舟が流よゆる小海りしげぬ延雲乃舟  
志性

角田河の舟舟のころつくと秋を月を  
疾能

淀川乃よりとまぬ月の海にさるる舟を  
為継の

海をさるとも角田河をさるる月を  
為成の

まをさるるそつとゆん後舟に月を  
少助の

為成の人本まよと河をさるる月を  
弁因の

月が小海に秋をさるる月を  
庭月 右定



狭りぬ我らもそよの秋おねやうの月と前  
貴季々々

遊まふ乃そかりぬふ庭返してまらぬ月の秋流り

秋氏々

古くそ意りて庭乃まうこ流る利てまう秋の秋月

あまぬ々

ふそ返して居る秋の庭ると一月の光も限る

定嗣々

何ぬなる人とあけさ庭れふはらへ男於てをり

師継々

浅茅生七科く庭とけゆつて落るまう秋の月

成実々

かきこひ神をるあつ波とて遠る庭と月もらぬ

秋氏々

茂るのふ庭れ遊の節とそちる也ふ秋の秋の月

修光

秋もろし人もひこ思ふれの庭と乃庭の月々

甚姓

庭とたはまや乃のまう乃庭るこまうな月秋

床能

此より



くよかも庭のしほのちとほくふくめをたてしむる  
為継物也

くよかの庭に草を生ゑてはこころをたてしむる  
為氏物也

くよかの庭に草を生ゑてはこころをたてしむる  
少乃因侍

庭に草を生ゑてはこころをたてしむる  
芥因侍

我門と初めはく月より一ふふはてはたふる  
園務 右定々

初ふふの園とをたてしむる  
資因侍

今日も又々霧立ぬとて初めはく月より一ふふはてはたふる  
右氏々

庭に草を生ゑてはこころをたてしむる  
右氏々

庭に草を生ゑてはこころをたてしむる  
定嗣々

園に草を生ゑてはこころをたてしむる  
師継々

かみ







君をいふことばは清き生にむしとて衣のり  
資子々

ひこと余は家とあり果てきぬのふ衣のり  
君氏々

君とて誰はあの子ふありとて思秋風を吹  
まぬ々

風をいふことのまのこ衣持とていふ吹送あり  
定嗣々

まの父今有て子安方の志をし時たて衣のり  
師継々

秋乃秋れ秋のまは衣のりあつこの衣打も衣のり

女実々

山乃乃乃この衣のり衣のり衣のり衣のり

君氏々

もぬて余衣とて衣のり山乃衣のり衣のり衣のり  
信光

衣の衣衣も衣の山のよぬ衣のり衣のり衣のり  
ま性

賤乃衣のり衣のり衣のり衣のり衣のり衣のり  
宗徳



酒とらまは振杯の羨れいあん夜は秋はゆづる  
為継物也

今さられ杯元のやま心秋風ふよよとる夜は  
為氏物也

余亦よ字昔杯元のよま夜とわぬおる夜は  
少物同侍

字からよ片やい杯向おれおの夜は  
年同侍

よ亦さく杯ぬ取乃平と知るる性や人の夜は  
皇陽宴 右定也

かゝる杯元の羨れいあん夜はゆづる  
資大孝也

ぬまぬさぬく句し女子のまよふ神も用よ  
於氏也

か人の杯元のやま心秋はゆづる  
ままぬ也

形もさく菊は夜はゆづる  
定嗣也

さうりえそま文字を破りしことひらぬま  
師継也



盃乃於うそへんくふゆつね雲のうかろき菊の如

女実々

盃ふ梅りふ菊れきふとふくふくふくふくふくふくふく

取氏々

盃ふうう包てふゆふ菊るちんよふゆふふふふふふふ

信光

九多ふ八重うく菊いし女子の神ゆりふと母いねし

芒性

百友な立秋のつくとせゆきゆんふ菊菊れ菊の如

宗能

方ば星光とうしと菊れ花つる月かふかうそ

為継物臣

菊乃花はふ九まふかうてそ老まぬ狂の父まふ

為氏物臣

九まにひうくちう法人の老まぬ殊乃菊れは

少右内侍

ほらまよる星れ位とみゆふ秋れ雲の菊れうそ

弁内侍

長月とらぬとふ所ふ菊とありふいと海ひと

松の葉

右定之々



原ふはなすからその松は杉本杉をばお葉のきしれ

脊負ふもの

神まひれ松の下病ふふと志れをよそそちを

杉氏々

松さしこと松の松の夕時雨を向そし杉は葉

らまぬ々

梅さゆり乃松の下葉ふ松こにさりまふ葉

定嗣々

わすれさそと夕日つやう杉添て葉とたけ松本り

師継々

まふ人乃神しんはくらのまはつ回の松は杉の葉を

成実々

病時ぬとこの再敷ふおふ色そあけを林こひん

杉氏々

ちりこの浮田の松は杉お葉かたしく病や又葉は

信免

病時ふゆりは葉ふ乃多くふ志のこれ松乃ち志の松を

甚性

村ぬれまこは葉ふ葉のとりくな松の杉さひん

病能



誰なる系乃瑞立同如きと地なる家より  
為継物也

と成る生田乃松の時多うん深く多うん秋の深き  
為氏物也

時多して減下秋の瑞を記さるる夜は  
少物内侍

意てうらゆふ色さるるかりこ木家阿多津南浦松  
弁内侍

時の雨うらゆふさるる春月也三置れ松の系多  
河結系 右定之也

梅のけぬれさるる柱を記さるる  
右定之也

立同如きと後松の瑞山本家そと物  
右氏也

系乃河の系は海いらぬ系は系  
右氏也

系乃河の系は海いらぬ系は系  
右氏也

系乃河の系は海いらぬ系は系  
右氏也



おのれいしらの波れ立回れぬとてしらねをうらみ

女実々々

山形乃お家かしの深衣きてふらむを首門のめ

形氏々々

山川おかえうしおほふる家のかまき色海は鏡

信光

立回れぬ乃綿らぬ海はよとてねそ妙き

甚性

いしつねさうお家のくふふよはけの上の秋おきと

年能

山川お若しお家とのとれしお思ひ梅りのあかり

為継の后

河風乃解ゆとて本止なると近うお家とてら

為氏お下

立回れぬたのちるんお家よ秋のしゆりな解と

おお内侍

打渡す柱はいそしつ川の汀のこを御家よふを

弁内侍

御家のあふふとの下はのこを立回れぬのたふと

九月直 右定々々



いりて小者のいりてとらん行方すぬ秋はとる  
貸り奉る

物をふ又あん年とれわを言ひ秋の行方りふ邦

秋氏々

吹風と是より出さじり秋と老とのいよあは

あまふ々

あて秋の別と今行ふらふも言わと行方しん

定副々

書とじく云紫の海のうひそとて紅雲ふあ秋はと

師継々

去秋は更りよふ深冬んま行秋の石よりと

成実々々

あやをけり血刃と知をくくすも秋の言れ

秋氏々

志多ふまかひ金をらん志りはよまもあは秋のあ

行見

秋の志の秋の波はとじたき方とあし秋の言り

蓮性

秋は今もととれけふ日のいりわにふ書と

秋法

ね



あかればついで川乃いそをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

あさひ月のをそとてあさひ月のを  
為継物也

師継也

一



秋をて冬にふり久長乃をかしうり河ぬかりて

成実々々

冬に石と分るこまにみえぬも時ぬ深ゆ神月如

取氏々々

神月志主と冬の三日月して、江川をのりてん

信光

方ふぬふたのよと屋の初時ぬ深首れを志主

甚佳

神と初時神とこれと河ぬいゆり神月如

輝能

初時ぬかりてふりけいあつたの初め初風とてん

為氏物信

神月時ぬと昔よそをい何ふと冬乃を志主

少初月侍

志主とてうらぬ多とをいよく言はぬ村冬に信

弁内侍

時雨の風のくまをい字を初ぬ冬に年如

前葉

右定々々

初らつて前葉と乃夕時雨深し初ぬのまに志主

首葉子々



今さらりよのよともりこいぬ葉の風はまふも甚く霞

杉氏々

神月つとよこいね乃山風の四方乃木葉の果はけり

あまぬ々

み葉のふると海を神のひろく家の山は風ゆたを

弁内侍

ちあひくとしくとなり山風ふきしりるけの葉

ききまよ

徳定々

ちりし木葉を風は根しころもとらうおれ萩

貞久子々

とらつら葉かぬたやとらゆん若のこまたの松の葉

杉氏々

冬うと乃葉しゆりふ小川河に初葉の霜をま

あまぬ々

初葉乃ゆ乃海芽うら枯れ秋れさこそをきゆ

定嗣々

あふふう事七ゆりそおむは日さふ枯れぬの冬

師継々

今約よとてし若葉と白くおむてのれ乳をいら枯

成実々

おたり



冬草乃葉を末とよみ重なるのよきと枯れし徳は貴

形氏々

と乃つし枯下し妙く冬草の徳はよきとせとうりし物

清見

志はたかき雲れ首尾し風汗し枯茶しきしと徳は

甚性

冬草とて人か志けりたのよき茶茶てよき枯下け

舞能

冬枯よく之れ妙なり枯生やと乃りたる地ふあまき

為徳知臣

冬枯乃し日向のあまきたよしとてよき茶茶

為徳知臣

じうし乃りて枯れたり枯乃色のみろふ可き冬草

か徳知臣

冬草よき陰草乃しとてそくく人かも同し時を移け

并同侍

枯れきく外ふか妙なり枯れしとて徳はよき冬草

浅雪

右定々

白草乃しとてよき冬草とて徳はよき冬草

賢太子々



今もまゝに雲乃名おふなこころおとす海に波を

松氏々

屋敷乃や屋敷とくそよ中流に波を海に波を

有波々

菊丸花おきくをそ移り行儀じから波を海に波を

定嗣々

白妙お海く雪乃を井山夕をえんよとて七なり

師継々

重明とおとくをえん遠岸系理と果とて波を

成実々

おらぬおのいふれ初書お初魚をたつとて人

顯氏々

海とてしとふ乃書のおりを海に波を海に波を

信光

石おやいさうり書れやる今おはぬとて波を海に波を

甚性

いさかお水とふのありとてとて神にくとり海に波を

宗能

流りの伝はえ果んお中お海に波を海に波を

為継お氏







あまのくや乃東山からいぬおのむら

顯氏々

こよふとむら乃とらうとけ言ふ世に果ぬおのふ

信覚

あつとれ松のきよふきのうとけ侍しけりなり乃定

甚姓

志りし木花ももろとらう乃侍侍とあ乃白雲

舞能

ひさし海客ゆふと世にさくはなぬ松の世

為継物臣

三右衛門乃乃乃雪のちひと様と花幾と侍

為氏物臣

かきとひと軒さまうと世にさくはなぬ松の世

少右内侍

九右とふらりあかおんさくはなぬ松の世

弁内侍

三右乃山の雪れ目さくはなぬ松の世

右定之

奮とら乃下ぬひぬよひぬさくはなぬ松の世

資良季々



冬乃比乃鳩のうらみ孫に成りよるはしのうらみ海果  
枝氏々

風吹かうらこ地よへるを秋の風なり乃経るを  
まきぬ々

物海くをくしよれ月には風しきく海乃くは  
定嗣々

月影乃まきりて地よへるを秋の風なり乃経るを  
師継々

鳩より乃下れ通海をゆりくうらみをせん春の海  
成実々

物海くよへるを地よへるはしのうらみ  
顯氏々

草うと乃さうけのうらみ水しよひも果ぬ度はゆい  
信光

池氷乃よへるを柳よへるはしの羽風しきく  
甚性

秋乃秋にじよえりまきり又草の池はつらぬ  
疾能

月影の海乃下れ通海をゆりくうらみをせん春の海  
為継物氏







し女子のじりしはあそよまきしあまのいふかたのいふの  
神

春うしそよのわりふらとまきん乃ちしはれを  
か

ま性

雲乃ちふちは日影のこすし女さひまし年の宗  
宗

年法

天は神の目もつくるにきこひもしはりあ  
る

為継約臣

九重乃豊明とくきひふひりそまきん乃ち  
乃

乃氏約臣

し女子の雲は雨の月まきんくまのありのを  
あ

か内侍

雲乃ちれよのわりふ立まきん乃ちのそふ月  
乃

内侍

雲乃上の豊あかり月の色ふ光とまきん乃ち女子  
乃

冬月

乃定之

風乃ちいせの水も海に雲ふまきん乃ち明  
乃

乃資子

冬乃あかり乃ちまきん乃ちまきん乃ちあ  
乃

乃氏



扶神乃栳の上ふかけびしゆぬおまの雲乃ゆり  
あまふ々

秋乃乃とひひゆりむらたれぬおまをさくりけ  
定嗣々

秋きよしとひまをるしゆ月をさきしゆをた  
師継々

おりの乃神うらゆりしゆのこれおまの月の終  
あまふ々

そのさか雲はなむしゆさかゆしきすの月の  
取氏々

久島の天乃さしゆえんさよのさす月の終  
はえん

芳乃さしゆらしゆのふしゆさすの月とる  
まじ性

今宵とさかゆしゆ月とん夜とるさくぬおま  
席能

霜乃さしゆさかゆしゆさかゆしゆの終の終  
為継胡臣

秋乃さしゆさかゆしゆさかゆしゆの月とるさ  
あまふ々



雲月をいばせしむるもさへんれを海あり舟

少ね肉侍

雲をの風はらりと高きよてくけし月影のさびさ

弁肉侍

冬七程はくあもあわはあかりみくそそあはけ

浮舟を 右定々

波のうたかたのいのかよきるたよじり波めをゆく

資大乗子々

父を不マを月浮舟に継ぐん時てらうく反舟りな

右氏々

ちとて海流ゆきしから人乃素人のなぶききり

右氏々

波をく破しじとまな子なる帯ひれふ程果あは

定嗣々

小梨文てなをな舟とあはしむる舟も今こん

師継々

今こいもふ乃十字浮舟女子をきらけは乃なを

成実々

なふあをいぬこの月影よこく破れをゆらけ

右氏々







乃が乃年當部いとおら民屋を世にこら野

ままぬ々

ふふふ何れまじひひふふふふふふふふ

定嗣々

はゆふふふふふふふふふふふふふ

仲継々

後ふ今日も言ねふひひふふふふふふ

成実々

後ふおとくし言ふりあふりねるぬふふふ

政氏々

石上ゆふふふふの目ねるしゆり果やせし言ね

信免

うりまふふふふしゆりまふふふふふ

芝姓

言ねふ何れまふふふふふふふふふ

宗徳

とらふり乃古ふふふふふふふふふ

為継翁卜

教ふてゆふふふふ月日ねふふふふ

為氏翁卜



為ははりのわいふの知りし松平殿さうりあ言れ  
少納内侍

見らりつゝふける年の言ふはひらひらと  
年内侍

妻乃々きまんと申し言はれさうりあ言れ

寶治百首四 志那

苛月恋 忠定々

けしきとてははりのかゝ病ありし為て神月殿さ

資孝々

天川目らそちと初月のさくも人ふ恋もさうり

松氏々

詠と八月せとて夜ふつひらり秋のしはる

五女々

三日月乃がのふとて初秋とて乃をさうり恋酒の

定嗣々



悉くして、江戸七粒の甲と月名をひびきりし  
師継々

は乃らふ、西粒より二月月のまじりて、  
成実々

悉くして、高、波の敷と昔力をよし、  
取氏々

ほしく、たたり、を、  
信光

さ、  
甚姓

い、  
年能

昔、  
為、

あ、  
為、

あ、  
少、

ひ、  
年、

年、

よ、



神ありて月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて  
奇雲ありて 石ありて

いづれありて月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて  
奇雲ありて 石ありて

是れ月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて  
奇雲ありて 石ありて

いづれありて月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて  
奇雲ありて 石ありて

天雲ありて月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて  
奇雲ありて 石ありて

定人翻

月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて

師継

月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて

女実

月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて

石氏

月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて

修光

月ありて星ありて西風ありて東風ありて水ありて

蓮性



宗乃と行て且河は雲れ何れにふまはるる  
并他

雲の河は乃并神代りなえとて宗乃を  
為継初也

いぬまらんうと世はうまのこり  
為氏初也

まらふうはるる雲れ果となつた  
少初侍

ふらんはるる雲とて  
并初侍

うまらるる清とて  
奇雨云

右定之々

長河乃と神の初りや  
資大寺々

村乃小やとも  
初氏々

いとしとよの架つて  
あまふ々

誰ふらととぬ  
定嗣々



かきうしよきふ乃中あふま神也といふるらたひき

神継々

敷うぬ身とてあはれさ乃中あはれさつゆりそま

女実々

あそこ社や者よ海ら流くこそこ神也といふ

取氏々

長初人といふしといひも早そ乃中あはれさ神也といふ

信免

踏留よ野果のこ社のもよあはれ神也といふ神也あ

世性

あしきうさきい海ぬる昔也といふ神也いふ海也

年能

神といふるは海といふ海といふもあはれ神也といふ

為継物也

待らぬ波が神といふとこれそらかといふもあはれ

為氏物也

忘るよといふ者もいふ我神乃波といふ海も海也

少乃内侍

雷うす海といふも神也といふもあはれ神也といふ

年内侍



まひしきとて人のほらこしをよとす神風  
奇風也 右定卿

わさふらの節のゆ風乃ちよとて多し可いかな  
貧乏子也

さらぬ別とやね志のふよむにけし神風  
秋氏也

まさらふとてまこし人のまの風神を  
まま也

を乃ちてしぬいあらひの我中にいんらん  
定副也

まが風ゆく目やう月神とてまの我神と  
師継也

あし乃ち使あらはとていとこいよふ  
秋風也

まがまはははははとてたのま風  
秋氏也

まがまはははははとてたのま風  
信光

まがまはははははとてたのま風  
まは

まは



もつせう種のおとらふひふら秋風とほいふ

并法

あはれ人なきしとてさかしの風をよめ

為継朝臣

天降風をよめ文のほよとて秋風とほいふ

為氏朝臣

いふまゝの風をよめ今もふとて秋風とほいふ

少将内侍

あふとて秋風とほいふとて秋風とほいふ

并内侍

あふとて秋風とほいふとて秋風とほいふ

右定少

あふとて秋風とほいふとて秋風とほいふ

資入重子

あふとて秋風とほいふとて秋風とほいふ

秋氏

あふとて秋風とほいふとて秋風とほいふ

右定少

あふとて秋風とほいふとて秋風とほいふ

定嗣







うし若くはしりふれ相やまのふく浦村のあひま

奇閑亭 右定邦

信守と云く人とうよる狂歌のありもれ国はあはれ

資方孝子

ちよしてはよふれは乃国とて思ふ心はあはれ

松氏

わびのりやもふさつとまらぬ海はあはれ

まきぬ

年取乃とれのかちぬ国はあはれ

定嗣

海はあはれ國の海はあはれ

師継

海はあはれ根んかふ海はあはれ

武実

海はあはれ乃國のあはれ

形氏

あはれは乃國のあはれ

信光

あはれは乃國のあはれ

正性



志あるはかきしんをさうしんそのふらね國にひら

年能

うそふろ誰いこの若しはふらねお後國

る継物也

程たのしんたりとそくかくえんをさうしん

る氏物也

いづしんをさうしんの言れ若しはつしんの中へ

おね内侍

ふらねいひお後おをさうしんをさうしん

年内侍

市くふけらそそまき進取の言いとれ若のそさうしん

奇遊恋 右定也

まう倉くおをさうしんをさうしんをさうしん

資次孝也

神よおはけ乃遊のそらいそくしんをさうしん

ね氏也

進本とらぬもその若のふらねの遊乃若は

定嗣也

志あるはかきしんをさうしんをさうしん

師継也



いそぐ港の由東河とよこふの礼てきよき解るは  
成実の

かろ方港乃とよこ水のきよきとぬきとぬき

取氏也

とよこ港乃きよの礼とよこふの礼とよこ

信光

石く港流乃とよこ岩乃とよこ水乃とよこ

世性

とよこ水乃とよこ坤先乃とよこ水乃とよこ

年能

三右衛門乃港乃とよこ取乃とよこ水乃とよこ  
為継納臣

忠乃とよこ水乃とよこ水乃とよこ水乃とよこ

為氏納臣

昔港乃とよこ水乃とよこ港乃とよこ水乃とよこ

少右衛門侍

河乃とよこ水乃とよこ水乃とよこ水乃とよこ

弁内侍

水乃とよこ水乃とよこ水乃とよこ水乃とよこ

奇東志 右定卿



かゝる事の本の始と為てりてその物りも遠く入る  
資入孝子卿

志すよ不難田久いんを深ね看乃とまりりやあか  
私

杉氏々

待別く人の心いしれ古をあの子もあぬ善き心そら

あまぬ々

心しゆらあふ多う秋の来く露を垂そふ

定嗣々

言ふはつとあはれ人の心通のころあ、あれ露きつ

師継々

後よ我うよひられ露けこい乃んともいけあめら

成実々

ほらり一人の心成知り、あまをさひうあれあふ

顯氏卿

友あや伏んあまの契少くもあひあ月見よ

信光

志すあやういあまのあまの心と我乃つらこあめ私

芒性

人よそあひあよんあまああめらういあのはあまら

年能



おろしつゝと波しつゝかき富士のこころは徳本  
為継物也

今更とあふらありけのわ淵の柱束をほさる  
為氏物也

うぬをあらはらふを評みひれわさく東に海は雲  
か物因侍

我神ふりま涙とをまえをわさうふらよの志れ束  
年因侍

恋しつゝとあふらありけのわ淵の柱束をほさる  
奇物也 右定之也

恨てもいそをあらはらふを評みひれわさく東に海は雲

貧乏季々

葛城のよこの契れ岩橋なたえくよぬまをいひ

杉氏々

契れよこの契れ岩橋なたえくよぬまをいひ

あまぬ々

と美よらう人小やうらうら契れ岩橋なたえくよぬまをいひ

定嗣々

逢来ハ今ハまゝの丸木橋りふふらうと様々

師継々



石上御りきり格作なるふ意まうとふありよとく

成実々々

夫ふ又意やとん弟小まなと取う甲のいひ

取氏々々

かきてふあしきりゆとまのたけ本方御格の意

信光

とまをけ取りとまを御取とまの格取家や立

世性

後小月目せ後る是の山たさうまきく意は

疾能

近來も今かきり格しからまうと御取格は

乃継物取

家より意ふ命とあけりのまを、御せりまを御

乃氏物取

中よりまを石とけしとまをこのまをくまを御格

乃内侍

しとまをまを御格のまをまをくまを御格

乃内侍

まを御格のまをのまをから格のまをまを御格

奇蹟忘 右定台



行なれ神志ちるく湊川色成波のうらまひ

資季々々

かゝらふの神れ湊のこほりけり果つ我ら

於氏々々

湊入の苦らに舟こらゆひらり又志乃道な

多々ぬ々

舟こらゆ河の初志ゆゆこらぬ

定嗣々々

舟こらゆれ湊の清きん君あり

師継々々

ひこゆきれ湊の立波のあふり

成実々々

かど林の神も海立きん舟色成浮石れ

於氏々々

舟こらゆりゆり波の浦の我ら

信光

舟こらゆりゆり波の浦の我ら

芒性

舟こらゆりゆり波の浦の我ら

宗能



屋をり行漢れ漢の美砂地は三冊とくき行ひし  
為継物也

漢同くてもゆきこも恋とよまよを塩のうえ  
為氏物也

立仰り漢より如彼乃去き一月くおあまも  
かお内侍

あひはくいよいよ心のこもくおせれあひたたり  
年内侍

今もそ漢ふれははれはけの遠せ物とん  
奇木恋 右定卿

ふそたんかふふとそもさるる物本入れあそん  
資良季也

うーさうん破さくたふ物そね進とそねははれ本  
頼氏也

橘の花はさきく首さくあそしんは物りひにり  
あまぬ也

夕耐ゆふふれあふあゆきあひそした人いそふ  
定嗣也

まらせこいそりやきと他のれははれはけ  
師継也







弟とては物なりと云ふは人知る所の秋神也  
資季々々

後名はともそのまじりければ此の人のまじり  
於氏々々

歎く物も花もまじりてあはれとてあはれとて  
まま々々

月並花をたふさふさふさふさふさふさふさ  
定嗣々々

今もこころふらふらふらふらふらふらふら  
師継々々

ほこりた人の心程とてまじりてまじりて  
成実々々

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
取氏々々

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
信光

今もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
芒性

この世はまじりてまじりてまじりてまじりて  
床能



わらうものまのまのふ所まはのまふくもそ年ん  
為継物下

今又つゝ為はらうまふけふとふねとけのからん  
為氏物下

枯祿まその存より之思ふふたはけり人社事上  
少お同侍

まも流ふま少しねぬ我中にはよく力さく人の免  
年同侍

年と包くふひゆんおふまふ思ふのまは石とま  
奇忠志 忠定卿

ういぞ程思ふよーらにのいんまふこつとまひね

資李々々

けいりぬまふとえつてまふのりくよは渡らぬまは

於氏々々

わらうかまて織まは越ふりあははあとのままま

ままぬ々々

かどくまはまふまふまの羽ふま落と神ふまを

定嗣々々

かー人のまのまのまのまのまのまのまのまのまの

師継々々



根後とよこふたし邦とよまのりあはれ

成実

そとのおりや身と知るしきりく

取氏

おはりの風の浦とたのこそくねはるね庭の松虫

信光

おのちんこそくそりふれあつたのり

甚性

我ぞこふねふの風乃事ふまをけりあ秋のね

兼能

る雲は雲乃ここふさし雲れとくめはひ

為継胡臣

君ふふんこまらりふれあをまはるひ

為氏胡臣

根とひあまのここふ雲れまよとくそ

少乃内侍

あつとひくそくそつねの波ねこくまえぬひ

弁内侍

力おろすこひ屋をそくま雲甘らうなふ

奇鳥恋 右定卿

あつと



あし者のいひとまのさく鴨はう入のたにけ  
資良孝子々

若方初月これ海よりくるる乃うたうあまのこをまかりて  
杉氏々

角田川といふ月の初るらぬ家より人かきあついで  
あまぬ々

ふ人乃初あもちぬ初るる若とこはけいあをそり  
定嗣々

とらあは初ふのこをさむらひあついで初あついで  
師継々

水とりつがごととまよと村あは立引る名をさつあついで  
武実々

かりがしあついで田と田中てあついであついで  
杉氏々

きり初てとひさりきりあついであついであついで  
信元

わついであついで水あついであついであついであついで  
甚姓

神よ初あついであついであついであついであついで  
宗徳



はやく初婚でもするぬはるはたのうとういふは  
為継物に

婿とりはるうたも多物と云いかきさくうのまはし  
為氏物に

池あれいひをそまし婿者の我のまじりしは  
少物同侍

ふふ同くさるぬ契のまじり居て死なれは社  
弁内侍

うさ人のいぬ衆のねもろくさくさくわぬの  
奇数恋 ち定之

とくえぬんはるのほひいふまじりぬはるは  
資良季々

草とりいひのまじりぬはるはと行かま  
杉氏々

君とまのまをまんぬあからまはるの  
ままぬ々

いよさんまふあられ約りて意はるるの  
定嗣々

妹もまらまふあふふまらまらまらまら  
仲継々



お茶のいりひのめいりしつちりしつちりしつちりしつちり

成実々々

かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

形氏々々

うーいふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

信元

お茶のいりひのめいりしつちりしつちりしつちりしつちり

芒性

かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

并能

独乃のゆきをぬるもぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

為継物信

妻のいりひのめいりしつちりしつちりしつちりしつちり

為氏物信

わさねのいりひのめいりしつちりしつちりしつちりしつちり

おね月侍

いさよのいりひのめいりしつちりしつちりしつちりしつちり

弁内侍

彼がいりひのめいりしつちりしつちりしつちりしつちり

奇玉恋

お定々々



かゝる秘を今にふまのりやち草育ぬ公なりと云ふ  
資子子々

ひろく倉いぶ何そと人といつりさういれ海と云へん  
秋氏々

今も通ふありもをたづ玉のをこのそ乃松を  
あまぬ々

上らふさひさえそ玉のまのまに誓りよほひそあり  
定嗣々

かばふよそく世雲はもふそとさう玉もくかか「妹小恋  
師継々

かひいんまゝ玉をらぬそてよとらるる家よ子  
成実々

志保て方らとつまとしてあひね目らハね玉神さ  
秋氏々

玉乃とぬくことねとさくもまえさとしこし本そ  
信光

いたん神のうそふらと方らと波おまのゆ  
芒性

波うそ麻風と玉まのひまくはね来るとは神  
序能



三河の志平ら玉丸の命をまらねばつたる  
為継嗣也

はちも神ふさしとては波の玉乃子とて  
為氏初也

子河の若衆の玉丸もくふとてふとて  
少お肉侍

を河ふさしとては波の玉乃子とて  
弁肉侍

ふさしとては波の玉乃子とては波の玉乃子とて  
奇鏡戀 右定也

玉丸は波の玉乃子とては波の玉乃子とて

資大季也

山とては波の玉乃子とては波の玉乃子とて  
右氏也

玉丸は波の玉乃子とては波の玉乃子とて  
右氏也

玉丸は波の玉乃子とては波の玉乃子とて  
定嗣也

玉丸は波の玉乃子とては波の玉乃子とて  
師継也



ふもも維新といふ語もなごころにありてはし  
成実也

あしは海よりとるさふらかひれはし  
取氏也

そとまひ形んたる層といひまふらつてはし  
信免

まらつ神の渡れまらつてはし  
ま性

唐うまのよしはし  
唐能

がつれ層の流れはし  
為継物也

面乳の別流れはし  
為氏物也

ちと流何やまの物さしはし  
おお肉侍

白ひかくもといひはし  
弁肉侍

まを流とのふといひはし  
奇枕也

右足也



波風酒所はらそひらりそをたははら作す至哉花  
賀賀子々

波がれ花小沙うはらそを我身何れ花かこ妙ん

花氏々

符よる三年花花れたなそ又酒子にぬそり花

多々ぬ々

波がれ花七々我意ハ神ちりり花波子たれと

定嗣々

ちとらハなとともうらな波がれ花うらと神ととら

師継々

波がれ乃花小巻の巻わうそ花符花のまをそつとら

成実々

志こるハの花ととも波海方ハ何れもう花子たらとら

花氏々

花がれ乃波の花と人らと男とともうら花乃小花

花氏

波がれ乃花小訓一ハ花花すこし花花之神小巻とら

花氏

うらそに花とともうら花花ととも人花花花とら

花氏



今へて後とすまると、海へく枕をまへ海ありまひ  
る継物臣

もらひのしほとよとる雲のほらさしとくまを、後れり  
る茂物下

いふ神てみえしそのよれなきまを、ほれ枕をまひ  
おの月侍

わいぬよれほもまを、ねの雲うへ枕をひやうねる  
弁内侍

独乃いづよみほねなせれお、枕小神と志のま  
奇衣恋 忠定之

恋神の病をさうとくまを、まらり枕風をゆ

資良皇子

まらり涙なりまを、乃をまを、まを、まを

杉成

今よまを、まを、まを、まを、まを、まを、まを

まを、まを

今まらりまを、まを、まを、まを、まを、まを、まを

定嗣

我下まらりまを、まを、まを、まを、まを、まを、まを

師継



うしろのこころをうしろのこころとて海にうつす

成実方々

はるなほ袖のよりの花衣のひをかりやひかり

成氏方々

ふくやうの深きうしろの肩の衣のよさをうしろし

信光

きえぬやうの袖のうしろのよき玉の衣のよさをうしろし

芒性

あはれやうの衣のよさをうしろのよさをうしろし

并法

しらけの心衣のよさをうしろのよさをうしろし

為继方々

かぶねや首のよさをうしろのよさをうしろし

為氏方々

きよさうのよさをうしろのよさをうしろし

少納言侍

そのつらや衣のよさをうしろのよさをうしろし

弁目侍

その乃の裳の垣焼衣のよさをうしろのよさをうしろし

奇方方々

右定方々

あはれ



たひ今とてまゝいひて梓弓ありははよんたるま

海老妻子々

海老屋の人を海と梓弓とてくぬ物とてかえ

杉氏々

武女娘とら乃もよと未はるふんよんは中よのなはま

ままぬ々

ふひとにけり梓弓とてくぬ物とてかえ

定嗣々

陰具乃何られもよとてくぬ物とてかえ

師継々

梓弓とてくぬ物とてくぬ物とてかえ

成実々々

我ふとてくぬ物とてくぬ物とてかえ

治免

契もつとら風と川とくうがまはれ物根れ

甚性

梓弓とてくぬ物とてくぬ物とてかえ

乃継躬臣

乃人の心とてくぬ物とてくぬ物とてかえ

乃氏躬臣



春半みよとてふとてふと根てふひことる能  
おの肉侍

後小まそとてふとてふと根てふひことる能  
弁肉侍

法真乃のそとてふとてふと根てふひことる能

寶治百首五 雜部

曉雞 忠定卿

鳴かそとてふとてふと根てふひことる能

實季々

何いふとてふとてふと根てふひことる能

杉氏々

便りてふとてふとてふと根てふひことる能

まま々

てふとてふとてふと根てふひことる能

定嗣々



五の乃月お杉新を定まらぬ産れ家のあくはすこと  
師継々

園乃産れ家のその祥といひし中一杉新を定まらぬ産れ家の  
成実々

老よ八八産れ家のお勢をさぬらむやまはすあけ  
取氏々

限りあまはらぬさよちのあきうしきさうまきひまのれ  
信光

松風を押的産れ家のそのあぬいしひまのれ  
正性

おんはく甲と違ふるもはる家のそのあぬいしひまのれ

年法

名乃孫生しよはらひし園のそのあぬいしひまのれ

為継物伝

孫光とておひたる屋を脱ふもはる家のそのあぬいしひまのれ

為氏物伝

旅人の脱しそ園のそのあぬいしひまのれ

お杉内侍

名よ八八産れ家のそのあぬいしひまのれ

年内侍



此の秋の夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

秋灯 大定々

まよふ秋の夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

貧乏子々

秋夜と眺むる時とて多岐ふてゆく

秋夜々

昔より秋の夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

五更夜々

さし夜乃の夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

定嗣々

言ふてまの夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

師継々

かゝる夜乃の夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

成実々

今こそ原の夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

秋夜々

おとけし夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

修光

誰かかゝる夜を眺むる時とて多岐ふてゆく

世性



文をよきとせしむる灯乃活をばらけそかの光く

年法

光思を世乃光好むまふにけうる光定れ灯

為继物也

い照る園とふそふ灯の光をふそ程たのじ原

為浅物也

まれば風り社の新えて光そうとれまとい

少物内侍

的摩らぬ神光ふ妙く灯をきたのまれなとまり

年内侍

小松中乃所と勢仁をとりけまをさむく灯乃乾

歳松

右定之也

為よきを松とふとまをそら松小松乃端の志月

資季也

けくそ年風の光を本をけとと松を風る書たり

杉氏也

をまを同せらけまをまをまをまのまを松本

まをぬ也

美代乃末とまをよまをまりとまの光をまをぬ

定嗣也



雲をたぐりて身をまよふ松をよもむとゆふに松は常なる

神継々

あはれ乃松をよもむの松をよもむとゆふに松は常なる

水実卿

石の世の松は小松の息をよもむとゆふに松は常なる

形氏々

後山をよもむとゆふに松は常なる

信光

白雲をよもむとゆふに松は常なる

芝性

神代松をよもむとゆふに松は常なる

彦能

鶴の山をよもむとゆふに松は常なる

為継物臣

松は常なる松は常なる松は常なる

為氏物臣

ゆふに松は常なる松は常なる松は常なる

少将因侍

風をよもむとゆふに松は常なる

弁因侍











うらぶらぶとていふをいひていふもあはれはけり

師継々

おゆらこの故をいふもあはれはけり

成実々

あやとていふもあはれはけり

成氏々

おゆらこの故をいふもあはれはけり

信光

あやとていふもあはれはけり

世性

あやとていふもあはれはけり

宗徳

あやとていふもあはれはけり

為継約臣

あやとていふもあはれはけり

為氏約臣

あやとていふもあはれはけり

少右衛門侍

あやとていふもあはれはけり

弁内侍











世ゆはこよれ世もあふ茶もあふゆの音もあ

叶継々

こよとち世もあふ茶の音もあふ

成実々

世乃人の茶とち物乃神也病也といふもあふ

成氏々

と神の神も病もあふ世の音もあふ

成元

あ茶の世もあふ茶の音もあふ

成性

今宵も世の世もあふ茶の音もあふ

成法

世もあふ茶の音もあふ

成継

今宵も世の世もあふ茶の音もあふ

成氏

病もあふ世の世もあふ茶の音もあふ

成実

片世乃人の茶とち物乃神也病也といふもあふ

成氏



墨乃唐ふ社てれ物々のおさく見しきり葉は  
江芦

かの上乃とひ入は小持して振葉れ昔秘ひた  
資入季々

難波江や流してさうり極しけのりせひひま  
杉氏々

難波江の昔のうらふ葉さくはゆり難波はま  
あまふ々

わさ緑のん全ふ社なまふかえくあ葉葉はらたの  
定入翻々

わさく難波城江と今よとそ昔糸たによは  
師 継物江

二橋江のむ江の昔のり小きそゆりたよそ葉はさ  
あまふ々

難波江の昔のりさくさくさくさくさくさくさく  
信元

昔れ葉のさくさくさくさくさくさくさくさく  
杉氏々

儀江の社あさくさくさくさくさくさくさくさく  
甚姓



昔れ紫の香とに露とあはれりて玉のけりえふ村ぬき

并能

秋ふらふに霞に白りふるの浮き名は月とよきと見し

為継明卜

難波の浪中もそく昔の工成又霞風をくくし

為年明卜

こころれ入にさきく昔れ秋の浮は海へく成れり

少右内侍

難波今昔風をそりたりふらふ浪のぬき目も

年内侍

難波浮きこいれ昔のくさ入に波は静なりとあり

浦和

右定之

うねりふらふに浦風はなほふれり人志をよ

資大守

うねりふらふ波のきぬ糸をふははるまはり

杉氏

浪に浦風は静小いゆきとありて波乃枕小き物

右美濃

志不たを巻風を船らふらふに年と波は

定嗣







浪るるり物あり舟ははるるるのひなまは浦波あり

拙山 右定郷

嵐のちりておほい拙山のこゝ書きておほい

資良季子々

おぼろしひんさるる後小杉本乃そ洞とくくおぼろん

秋茂々

わくく日ぬくこれかえぬをへ重立雲は書れん

あまぬ々

え本川はれ山の拙人かそよ秋のふけりて年

定嗣々

うらまはれとふふの拙人かそよ母よとふ

師継々

明らりてはれ拙人かそよ若くはふとふては

成実々

いふらひひさひさよとふらりてはれ拙人かそよ

政氏々

拙人かそよわきにゆるりてはれ拙人かそよ

信光

ふらたりて拙人のせとくくくくくくくくくくくく

世性



志らりし松乃松東の松立てては山乃松の松は  
年法

松本ら松東の松もさうねこの松を時置れ出らる松  
乃継物也

松より松東の松本松にさへ松則と人合川と  
乃氏物也

明な言ぬは松の松本たの氏も我より松を則は  
少物因侍

山人らさぬは松もさへひりふん松乃松の松もさへ  
年因侍

は松とさぬ松乃松の松もさへりめとが松本年之松

岸苔 乃定卿

岩そく岩松さへ松りとも松すさへ松昔れ多松

乃貞季子也

松成の松乃松本松と松くとも松昔の松と松

松氏也

昔深く山の松松は松もさへひりめとの松松

乃松也

松風波の松れ松から松の松も水も松

乃定嗣也



及今人の事えとてあし知事とてまま其の苦練  
師徳也

肯んまそり始りし程り此の苦のま中  
成実也

山ゆゑと称の者乃苦楚をりし流のまの  
形氏也

ま河乃者り故のまもり下とてま苦れ  
信免

ままの者れまにじま苦れ練のま川れ  
其性

有まとなまごり乃河乃のまのまのまの

其性

苦深まののまのまのまのまのまの

其性

有まぬ行ぬれ河のまのまのまのまの

其性

まのゆれれ者れ者れまの苦乃極の極の極

其性

まのゆれれ者れ者れまの苦乃極の極の極

其性



苔深くはるる山をこしりしを軒れ河乃春の浮波

山家水

右定郷

山深く世小きる今を記ありけりこころいふはあはれ

資力重子々

ゆり清く木れ葉の下れ煙あり誰くもゆん谷れすま

杉氏々

かきよむし今のありかこころとら接のこころ川のあり

みまぬ々

山ゆり竹れらひいと清いさそ軒端とさる谷れ下あり

定人嗣々

是乃乃中希とて流川のありそ軒小じとひありつ

師継々

軒らるよ下あり書さけわらきりやうあはれふ

成実々

我唐れ軒のらひよありそたえは家小那女小那

形氏々

清ひくま山れ宇やえんんをそとありをたれまよあり

信光

膝ひと我をわ郵是乃乃山井れありと流うりりり

蓮性



うのささくらひのあはれ絶てあふふとるははるる  
年法

手舟の心狂と身ふ乃首のけひぬらうそく  
為継物臣

尋ふく枝しとていふもえらうふれ井のあ  
為氏物臣

と酒父と由とと本口あ山里の家のまはるをて  
少納内侍

芥菜のくちう板井城ありとていふたの然れ山里  
年内侍

あまのりあはれいさうたふらうまわし海にぬれなくぬ

山家嵐 右定之々

吹がりをわくからていふ人といふあふれ林れ中ま

資大季子々

都今えとるまぬあうとに率あていぬぬ目とまふ

杉氏々

人らぬまのあぬ谷のまはり八月とわくあたり

あまぬ々

わく吹と山陰れ松のうまきくにはまてまうりり

定嗣々



首きよと嵐れきと松と植てふ山は信者守りて

うも世ふふ久なり山は松乃ありふふと世ふ

成実々々

まらきと酒は木の葉のてりて嵐ふよと世は

形氏々々

ふふりふ松乃嵐かひひと松ふと世は

信光

新編より本丸と文小ゆりて尾上の松ありて

世性

山近ありて松とびと嵐ふよの世は

疾風

ふふとと松と嵐の音相山ははりて

為継物臣

今文小松かよ君と松りて松と嵐と文小松守りて

為氏物臣

山は松のふふ乃わよとに嵐ふりて

少物内侍

山は松守りて松りて松と嵐と文小松守りて

弁内侍



本は成瓦の事七字読ぬらく小合は林乃山と

回家兩 忠定卿

孫是系ふ家これ由ふ家此子たあつと種落るは

資貞孝子々

林は所前田は店のはりて二村ぬぬとてん

於氏々

孫七は田はの店乃志守り林ぬぬかひの

五々ぬ々

病とてふ田はふしあつてたつる書はるる

定八嗣々

うが字はぬれゆふと田はははとやまの原は

師継々

吾店乃田は猶とあつたよと傳ふぬまの

成実々

傳ぬぬののふしつと之外田乃とぬぬぬ

於氏々

店近く林は雲とぬぬぬと記す傳ふぬぬ村

信覺

ぬぬ新端小はぬぬ山田乃ぬぬぬぬぬぬ

芝姓



卯酉たつとつたのりふふあやととふ業に我をよはかり  
定法

を卯酉かりふれ鴨のなとふふふぬふのぬぬふふか舞ん  
る継物也

山中卯申れ唐ふ立りてゐの厚も日ふとにけり  
あ氏物也

武徒ぬ卯乃らりふひさゆふふとふふととふり  
少物也

秋の田刈りてあつと神おとして唐とふぬあつとふふ  
弁也

山田ちりは宗とてふふふふふふふふふふふふ  
張也

あつとつたのりふふふふふふふふふふふふ  
右定也

あつとつたのりふふふふふふふふふふふふ  
資大也

あつとつたのりふふふふふふふふふふふふ  
右氏也

あつとつたのりふふふふふふふふふふふふ  
あ氏也

あつとつたのりふふふふふふふふふふふふ  
定也

定也







孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

孫宿

右定之

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

資大寺子

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

杉氏

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

多美奴

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

定嗣

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

師継

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

武実

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

形氏

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

信光

孫人の神と云ふは此の山と云ふは孫人の神なり

芒性



志乃東也相も心と海ら相しや事なり物記をて唐か  
疼痛

いし海に雲のくねる波も相と暮る相はる所りけ  
る継物也

書とまゝ夕色に空とひかしくはる波の若きか  
る氏物也

東登風之乃波のり枕ゆもささるぬ成る相け  
少物也侍

とれはる夜にけり神宮の草花りそわさそと相成  
并内侍

かりそえに海も草花にわゆるよと是と見れ枕也

後泊

右定入也

波の青れりそささるぬる波も相と神別也唐也

資入事也

舟もいづる波も唐を定たれ行の塩乃流ひま

右氏也

そとまゝぬる波のそとまゝ下り唐神も妙も月也

右氏也

そとまゝぬる波の流れりおと初ぬ波も相と

右氏也



任者ぬゝ入のし海魚の腹小からぬききく今昔  
師継々

船と老くふたはし大徳の江の流松舟もよこよこ  
成実々々

四方は海や雲をさうよき月影も波と暮せし海舟人  
形氏々

風はさん波流と分る漕舟は新はく方と流り如ん  
信免

室風在松の流りぬるこはらあふひく破乃松風  
芝性

けり書ぬるまは懐ふ舟とそはけはこころも玉もひつ  
疾流

看るんまは流の松れれとさん流りしと海舟と今復を  
乃継物臣

を方流不せよさ漕道とさうかよさそらぬ志取  
乃氏物臣

漕とひ浦とわぬ流るる松れ波はこころ流りけ  
乃物臣

海舟寄湊に流るるよ知もあふぬも我とりとらん  
弁物臣







かげ海らじに浦の山と波の志を強り此の

定能

れがれ山とそれ霧乃晴きと海を海は深きなり

為継物也

是の海は波の上れかきとくはくはくははは

為氏物也

清ん浮打せくこといかに此の神は波のたを

少ね物也

伊雲乃く五とたふとえぬ物きとくは神の境を

年内侍

是の海は神は白波きえくはくはくはくはくは

寄社祝

忠意也

照是物也あま浮勢とま神らくはくはくはくは

賢季也

神はくはくは神さくはくはくはくはくはくは

相氏也

くはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

五教也

くはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

定嗣也



大君の御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

御継

君の御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

成実

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

取由

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

信賢

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

蓮性

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

宗能

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

為継

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

為氏

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

少内侍

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

弁内侍

御心づかしの御柳を御心づかしてと文の御

寄日記

忠定



君の爲に雲より雲に降りてゆくも釣れば出づるのて  
賢季也

日暮の紅日影とてを君の傍へ白雲代を乞ふ事多し  
秋氏也

と晴るくもいと多し日本の秋は晴るの秋多しなり  
左敷也

曇る秋は人の多し一はみちの照と朝日光多しなり  
定嗣也

去るの秋は人の多しとてを君の傍へ乞ふ事多し  
師継也

と晴るくもいと多し日本の秋は晴るの秋多しなり

成実也

朝日よとてを君の傍へ乞ふ事多しなり  
秋氏也

朝日よとてを君の傍へ乞ふ事多しなり  
信覚也

と晴るくもいと多し日本の秋は晴るの秋多しなり  
蓮性也

と晴るくもいと多し日本の秋は晴るの秋多しなり  
宗能也

と晴るくもいと多し日本の秋は晴るの秋多しなり  
為継也



曇るはあはれとあはれと久留し玉は日よけの  
わたり物

あはれはあはれとあはれと久留し玉は日よけの  
わたり物

あはれはあはれとあはれと久留し玉は日よけの  
わたり物

あはれはあはれとあはれと久留し玉は日よけの  
わたり物



